

子規俳句潺潺 6

——明治三十年

宮坂敏夫

新年の棺に逢ひぬ夜中頃

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。新年の部に出る。新聞「日本」（明治31年1月3日）に載る。『俳句稿』は俳句の草稿の意。ノートやスケッチ帳などに書いた句を四季別、時候、人事、天文、地理、動物、木、草などの項目に類別したもの。『寒山落木』はさらに項目の中を季語別に配列した清書本（和田茂樹・『子規全集』第三卷解題）である。三十年以降は『寒山落木』に清書する余裕がなく、草稿のまま残されたもの。

新年（新年）が季語。新しき年とかあら玉の年の用例は古いが、新年の語が歳時記に載るのは『三湖抄』（編者未詳・寛文四）に「新年・改まる年」とあるのが最初か。「春立^{（はるたて）}や新年ふるき米五升」（芭蕉）の有名な句も「春立^{（はるたて）}」が季語。ただし、「似合^{（にあは）}しや新年古き米五升」（鵲尾冠）という句形が歳旦吟として伝わる。これは「新年」が季語。古い例である。

元日の夜中に、ひっそりと棺を担いでゆく葬列に出会った。目に

触れるもの、なにか新鮮な感じがする新年に、そこだけは違和感があったとの意。

意味からすると、「棺に逢ひぬ新年の夜中頃」の意であるが、それでは一句のもつおどろきが伝わらない。「新年の棺」という語句に衝撃がある。新しい年の目出たさと亡骸を納める棺とは対極にあたることだからだ。句中の「の」はいささか強引である。棺を修飾する形をとりながら、こゝはやはり、下五の夜中頃にひびくとみるべきであろう。

囁目吟なのか、想像句なのかは明らかではない。想像句としたならば、いく分その想像に切っ掛けを与えるものとして、鳴雪の孫の死があったのかもしれない。一月五日付鳴雪老先生宛の書簡は「承り候へば御愛孫御遠逝之趣嘆かし御愁傷之御事」と悼み、こんな句を記している。

新年の霜と消えたるはかなさよ

また、いささか迂遠な指摘にすぎないが、この年一月に作られた新体詩「老嫗某の墓に詣づ」「田中館甲郎を悼む」「少年香庵を悼む」「古白の墓に詣づ」（いづれも「日本人」第三十五号・明治30年1月

20日)は、墓詣や哀悼の詩である。さらに新体詩「新年」(「日本人」第三十四号・明治30年1月5日)にしても、正月をよろこぶ女の童と無常の思いに囚われた白髪のお翁との掛け合いのような詩で、「天に新年無く、地に新年無し。人間只新年と名づけ、人間只自ら喜ぶ。あらはかなの意味も無き今日の新年かな」といった醒めきった厭世感が漂っている。

掲出句が詠まれたほど同じ時期の作者の周辺をさぐると、以上のようなことが浮んでくる。これらのことがらと掲出句が作られた事情とどう関わるのかは詳らかではないが、明治三十年(一八九七)早々、子規は死の意識にとらわれていたことはたしかである。

初夢の何も見ずして明けにけり

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。新年の部に出る。新聞「日本」(明治31年1月4日)に載る。

初夢が新年の季語。一読して句意明らか。「何も見ずして明けにけり」は一見、平凡なことがらを詠んでいるが、先掲「新年の棺」の句で指摘したような、ときに子規を倅とくにした厭世感の類を見い出せるのかも知れない。構えたところのない率直な句だ。

初夢の思ひしことを見ざりける

明28

初夢の何も見ずして明けにけり

30

初夢に尾のある者を見たりけり

33

初夢の句は生涯十一句と少ない。そのうちから三句を並べると、子規のそのときどきの傾向が歴然とする。屈曲した句風から晦渋さをとどめない素直な句風に、さらに自由奔放な自然な句風へと、変わっていく。

掲出句は、平凡なぎりぎりのところをうたいながら、陳腐ではなく、たしかかな詩になっている。そういった句だ。

蓬萊や上野の山と相對す

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。新年の部に出る。作句は前年の冬。月日は明らかではないが、子規庵での句会。蓬萊は席題である。会者は、子規の他に楽天、繞石、愚哉、四方太、把栗、墨水、虚子、牛伴、可全、左衛門、碧梧桐、鳴雪、太古。掲出句には、四方太と把栗が◎、可全、左衛門、牛伴が○を入れている。

蓬萊が新年の季語。蓬萊は目出たい正月の飾り物として、東海中にあると古来信じられてきた不老不死の国、蓬萊山を形どって作ったもの。供え物は、たとえばこんなもの。

「新年、家々に三方台に齒朶・讓葉を插敷かひしきとし、米を盛り、松を立て、海老・熨斗・昆布・榎・搗栗・橙・柑子・橘・蜜柑・柚・穂俵・田作り・野老・梅干のたぐひを盛り、賀客来ればまづこれを供し、新年を祝す」(『年中行事大成』・文化三)

句意は、山の幸、海の幸を供え、目出たく形づくった正月の蓬萊

の山と戸外に見える上野の山が相向い、拮抗し合っていることよと
いうのである。

一説に、蓬萊を飾り、新しい年を迎えて、改まった気分で、私が
上野の山と相對している意に受けとれないこともない。やの切字を
嚴格に解するならば、相對するのは、蓬萊ではなく、私と受けとる
べきであろう。しかし、「相對す」と相の字に力を入れ、同等に張り
合うことを強調している点に留意するならば、對する主体が私であ
るよりも蓬萊であった方が一句のおもしろさが極立つ。蓬萊は上述
の通り、神仙の住む仙都、蓬萊山を形づくっているからだ。聖なる
蓬萊山と俗なる上野の山、虚なる山と現実の山、室内の小さな飾り
物と戸外の大きな景物など、對照があざやかなのが立派な絵になる。

蓬萊や山のものより海の物

明26

蓬萊や南山の蜜柑東海の鰯

27

右の例も切字やを用いながら、以下十二音に蓬萊が関わっている。

鶴の首のどかに亀の首あたゝかに

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。春、時候に出る。『新俳句』春之部、
春雜にも入る。

「のどか」あるいは「あたゝか」が春の季語。子規は一句に季語が
二つ以上のときには、特定の季語をとり出さず、その季の雜に入れ
ている。『新俳句』の分類がそれである。

掲出句は、鶴は千年、亀は万年という長寿を言祝ぐ『淮南子』の
説話を踏まえているが、日本人にとっては、御伽草子「浦嶋太郎」
の結びに見える鶴亀の話の方が親しい。玉手箱を開けたばかりに七
百歳の老翁と化し、亡くなる太郎の魂はやがて鶴となり蓬萊山に行
く。竜宮城の姫も亀となってやってくる。常世の国蓬萊山で再会し
た鶴と亀は、そこに永住することを免されず、ふたたび地上へ下る。

そして丹後国の浦島明神という夫婦の神になったという名高い話。
掲出句は、一見、鶴亀の飾り物を詠んだように受けとれるが、私
は、動物園などの実景を想像する。写生を試みた句として、句意は、
春たけなわ、泉水の汀に立つ鶴の首は悠揚迫らずのんびりと伸び、
島の石上で長まる亀の首は、いかにもあたゝかだというのである。

発想の契機は祝婚句のようにみえる。が、「可全妻を迎へたる祝ひ
に」と詞書がつき、

祝はゞや花婿花よめ花椿

『新俳句』では、右の句を春之部、祝賀の句に分類している。典
型的な祝婚句だ。掲出の鶴亀の句と比べるならば、掲出句は、祝賀
の人事句風によまれた実景句なのである。定型のリズムを逸脱した
破調は『新俳句』時代の子規の句にしばしば見い出される。

小夜更けて雛の鼓の聞えけり

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。春、人事に出る。新聞「日本」（明

治30年3月3日)に「雛祭」と題し載る十二句のうちの一句。
雛が春の季語。

句意は、花が更けて、静まり返った中に、雛段の雛がうつ鼓の音がきこえてくるというのである。

可憐な幻想だ。五人雛子の雛は、いまにも鼓を打たんとする風情。それが夜更けともなると、雛たちだけの時間となる。気まぐれに打つ鼓の音がきこえてくるのである。

初午やふけて狸の腹鼓

明26

類想句である。午と狸の取り合わせの妙に興じている。しかし、いささか作りごとめいて、現実感が乏しい。一方、掲出句からは作爲が感じられない。無理なく想像される。

白酒の酔やひゝなに恨あり

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。春、人事に出る。新聞「日本」(明治30年3月3日)に載る「雛祭」十二句中の一句。『新俳句』春之部、雛に、『新派俳家句集』(近藤泥牛編纂・白鷗社・明治30年11月15日刊)春の部、雛に入る。雛が春の季語。

句意は、雛祭の白酒にすっかり酔ってしまった。これはみんな雛が私を酔わしたので、なんとも雛がうらめしい、というのである。

「あどけなき子供心を現し且つ非情の雛様をからかった」(『春子規俳句評釈』)との寒川風骨の鑑賞は的確。作者はどこか女性のような

感覚で「ひゝなに恨あり」といっている。

一つ落ちて二つ落たる椿哉

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。春、木の分類に出る。『春夏秋冬』春之部、椿には、表記「落ちたる椿かな」とある。新聞「日本」(明治32年5月4日)に「椿」と題し載る。詠まれたのは、三十年春(月日不明)の子規庵運座。その日は運座が二回行われ、二回目の席題が椿。子規は八句出句。掲出句の表記は「落ちたる椿哉」とある。出席者は、折井愚哉(岡山出身)、河東碧梧桐、加藤雪腸(静岡)、坂本四方太(鳥取)、弘光春風庵(高知)、上原三川(長野)、下村牛伴(愛媛)と主人の八人。

句意は詳述にはおよぶまい。先程、椿がボトリと一つ落ちた。椿の木の下にこれで二つ花が落ちたことになる。二つの落花が仲よく並んでいるよ、とでもいう意。

たゞし、別解が考えられないわけではない。椿が一つ落ち、つゞいて二つ目が後を追って落ちたの意とも、二回目には二つ落花したとも解される。

右いづれとも決めかねるが、上句と中句との間にいささかの飛躍を含んでもおもしろいのは、先の解であらう。こゝではそれに従う。

先に触れた第二回目の運座には、次のような句が出されている。たゞし、出詠者は不明。

二ツ三ツ塵塚におつ椿哉

二ツ三ツ御堂の椽に椿散る

椿ちりて二ひら三ひら葉の上に

だれの点も入っていないので、作品としては評価されていない。が、このような落椿の様態への関心はむしろ深かったようだ。右の句が出る第二回目の運座、椿七十一句中、落椿の句が三十八句、五十四パーセントと半数以上である。子規の句も一座の落椿への関心を鋭く感じとってつくられている。

なぜ落椿か。これは私の推測であるが河東碧梧桐の明治二十九年

(一八九六)の作

赤い椿 白い椿と落ちにけり

碧梧桐

右の一句の反響がなされたものではないか。碧梧桐の落椿の句を、子規は、本年一月二日から三月二十一日まで二十四回にわたる、新聞「日本」での連載評論「明治二十九年の俳句界」、第三回(1月4日)に、碧梧桐の印象明瞭なる代表作としてとりあげ推奨しているのである。推奨するところ、すなわち子規の関心の赴くところと判断されるので、その一文を次に記す。

「椿の句の如き之を小幅の油画に写しなば只地上に落ちたる白花の一団と赤花の一団とを並べて画けば則ち足れり。蓋し此句を見て感ずる所実に此だけに過ぎざるなり。椿の樹が如何に繁茂し如何なる形を成したるか又其場所が庭園なるか山路なるか等の連想に付きては此句が毫も吾人に告ぐる所あらざるなり。吾人も亦之れ無きが

ために不満足を感じずして只紅白二団の花を眼前に観るが如く感ずる処に満足するなり。」

碧梧桐は、右の椿の一句によつて、子規がこの時期もつとも推奨する印象明瞭なる句をつくり得る作者として、つよく印象づけられたのであった。印象明瞭とは、「其句を誦する者をして眼前に実物実景を観るが如く感ぜしむる」ことで、精神というような知識によつて抽象された無形の美ではなく、感覚により掴み得る形体の美を指すのだとも、子規はいっている。

碧梧桐は椿の句によつて、蕪村の系譜につながる印象明瞭なる句をよみ得る先駆者となった。彼に絶大なる自信を与えたのではないだろうか。

先の第二回目の運座に、こんな句が出される。

赤い椿 白い椿の池に散る

春風庵

この句を碧梧桐が採り、しかも、「散る」を「落つ」と添削している。池という場所が加わっただけで、碧梧桐の一句と内容、表現とも同一といつてよい。『去来抄』で、内容の類似を等類といひ、表現の類似を同意、同巢、同竈などといったことはよく知られているが、右の春風庵の句は、等類でも同意でもない、むしろ剽窃の類。それを当の碧梧桐が宥して自句と同じように直しているとは、自句の完璧さに対する自信以外、なにものでもないであろう。

翻つて、子規一門の運座にあつては、微細な違いがあれば、等類、同意などが大方、許容されていたとみてよい。

さて、子規の掲出句に関しても、あきらかに碧梧桐の句と等類ではないか。色彩感覚を際立たせた表現から数字という知的な表現へ抽象化されているが、それは同一の落椿を対象化していると受けとれないことはない。

内容の違いが、いく分あるとすれば、碧梧桐の句の落椿は「白花の一団と赤花の一団」と子規の鑑賞にあるように、マス（集団）とみ、子規自身の句は椿を単数とみている点である。

子規の句には、碧梧桐と牛伴が点を入れている。こゝでも碧梧桐は、自身の句との類似を気づきながらも、意識では優位に立っていたのではないか。子規にすれば、碧梧桐の句と等類であることを承知しながら、落椿の形態を数字に置換し抽象化したことで、時間の経過をうたい、子規流の印象明瞭な句をものしたものと信じたのであろう。

嶋々に灯をともしけり春の海

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。春、地理に出る。新聞「日本」（明治33年5月18日）に「春の海」と題し載る。

春の海というと、子規は「極めて古くより記憶に存してある句」（『蕪村句集講義』春之部、明治32年11月17日）と、二年後の輪読会でいう蕪村の句を、このときも当然、意識していたに違いない。

春の海（ひなうみ）終日のたりのたりかな

蕪村

『俳諧金花伝』（安永二年刊）によると、「須磨の浦にて」と前書きがある。もっとも、丹後の宮津湾での印象とする説もないではないが、やはり瀬戸内海あたりの春の海ののどけさがどこかふさわしい。掲出の子規の句は場景からして、二年前、須磨保養院に入院した頃の瀬戸内の印象がはたらいっているのではないか。入院は七月下旬から一か月余で、季節は春ではなかったが、「嶋々に灯をともしけり」といった光景は、見馴れたものであったであらう。

子規は蕪村の春の海一句をどう評価したものか、「果たして善い句であらうか悪い句であらうか」（前掲『蕪村句集講義』）迷っていた。そのため、春の海への着眼を、蕪村と同じ昼間ではなしに、夕刻に移したのではないか。終日のたりのたりとものうげに揺蕩たゆたうていた春の海が、いつときの生彩をはなつのが灯ともし頃である。あちこちの大小の島々に灯がともり出す。灯のもとには、たのしい円居が想像される。悠長なる昼の海とはうって変わり、にわかには郷愁をさそう光景だ。海辺近くに育った子規にとり、島々の灯は、家郷へのなつかしさをそるものであった。

句意は右のごとし。改めて説くまでもないであらう。

紅梅の一枚（のき）櫓の灯に映ず

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。春、木に出る。新聞「日本」（明治30年2月11日）に夜梅十五首」と題し載る。

「檐」は軒、簷とも。屋根の下端の張り出したところ。

句意は、紅梅の一枝が、檐先の灯に照らし出されて、なんともうつくしいことよ。

僧寝ねたりて廊下に満つる梅の影

梅白く庭の禿倉^{はくくら}に灯をともし

右の二句とも、掲出句と同じ頃の作。『新俳句』に入る。いずれも漢文口調の硬さがあるものの、清爽感が漂っている。

大砲のどろ／＼と鳴る木の芽哉

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。春、木に出る。下五の表記「木芽哉」（『子規全集』第三巻・講談社版・「抹消句」とある。後に「ホトギス」第二巻第七号（明治32年4月20日）「木芽選者吟」に載る。「随問随答」（「ホトギス」第二巻第九号）という読者の質問を子規が答える形の欄に、第十六問として掲出句が組上にのぼり、「大砲と木の芽との調和がどうも分かりませんが御解釈を願います」とある。子規の答は、「調和は説明の仕様なし」と素気ない。

掲出句は二つの点で注目される。一つは、季語以外で新しい日常語を措辞に生かしたこと。大砲がそれ。汽車、人力車、宣教師、巡査など新しい時代のことばを採り入れるのに子規は積極的である。

二つは、「随問随答」のように、掲出句の取り合わせの妙にある。

遠景に大きな音と近景に細かな木の芽の対照。聴覚と視覚の調和のどかな春の日に、遠くどろどろと鳴り響く大砲の音は、太古の巨大爬虫類の叫びのように、ふしぎな臨場感を与える。音は烟霞にのまれ、ひとつひとつ定かではないが、さかんな木々の芽張りを促しているかのように遠く衍する。

「どろ／＼」の擬態音と下五の省略の巧みさが、骨太な構図の明確な一句をつくり上げている。

句意は、以上の鑑賞によって明らかであろう。

「大砲が遠くどろ／＼と轟ひてゐる眠りを誘ふ様な木の芽日和を漠然と詠まれたもの」（『子規名句評釈』ではないとの青木月斗や谷村凡水の説に、私も同感である。

足の立つ嬉しさに萩の芽を^{（ふた）}検す

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。春、春草に出る。「病間あり」と前書がある。新聞「日本」（明治32年5月11日）に「病間あり」と題し載る。しらべる、ただす意の漢字は検が本来であるが、検も通用。子規は通用の文字をあてゝいる。萩の芽が春の季語。

きのふも見けふも見る萩の芽さすかと

同時期の作と推定される句が『俳句稿』に見える。萩の芽を検すとは、右の作であきらかのように、萩の芽生えをたしかめる意。「足の立つ嬉しさに」は、結核性の脊髄炎（カリエス）のため腰痛ひど

く、二月十六日以降、痛み止めを服用する毎日とはいえ、杖にすがって、わずかに足が立つ、そんなぎりぎりの起居のよろこびを指したものの。「足の立つ嬉しさ」と「に」一字を省くと定型のリズムであるが、子規は、字余りの句型をとっている。定型にはまった躍動感の強調よりも、日常のさりげない、しみじみしたよろこびを表現したかったものと思われる。

草の芽は、『俳諧袖かがみ』（延享元年）などには一月の季の題に見えるが、実際の萩の芽立ちは草の芽の中では遅く、春酣の三月の声をきくあたりか。三月二十七日、子規は主治医佐藤三吉博士の執刀で背中にできた腫物の膿をとる手術を受けている。カリエス症状が進行したのである。この日以後、当分病床に寝たきりになる子規にとつて、病間、足の立つうれしさに庭先に出たのは、いかによろこびが大きかったことか。健康人にとっては、さしたることもない些事が、病者には一日の一大事として記録されるのである。『俳句稿』の配列で、掲出句の前に出る句

庭踏んで木の芽草の芽なんど見る

右の作も、同時期のものか。「足の立つ嬉しさに」とほど同じ意は、「庭踏んで」の五音にこめられている。単に庭に出るとか庭に立つという虚字ではない。足の立つ嬉しさに庭を踏む、生きる一步一步の哀歓がうちに感じられることばとして、「庭踏んで」は、平凡でしかも非凡な表現だ。

前書「病間あり」は、翌三十一年（一八九八）夏の句にも付けら

れる。「病間あり」三句とみえるのは、こんな句。『俳句稿』に、椅子を移す若葉の陰に空を見る
若葉陰袖に毛虫をはらひけり
若葉風病後の足の定まらず
右の句になると、足の立つよろこびはなく、子規は抱きかかえられるようにして、久しぶりに庭に出たものであらう。

短夜の我（わ）を見とる人うたゝねす

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。夏、時候に出る。「病中」五句と前書がつく、掲出句は第一句目。他の四句を次に記す。

短夜やたま／＼寐れば夢^苦わろし

餘命いくばくかある夜短し

この熱さある時死ねと思ひけり

行燈の消えぬ短夜四時を打つ

右の短夜、餘命、この熱さの三句は、新聞「日本」（明治30年7月24日）に「病中苦吟」と題し載る十一句中の三句。行燈の句は、同新聞（明治32年6月18日）に「短夜」と題し出される。

掲出句は、短夜が夏の季語。春分から夜が昼より短くなり、夏至はもっとも夜が短い。短夜は万葉集以来、明けやすい夏の夜を惜しむ情緒を詠むものとされてきた。王朝時代の貴族は後朝（きんぎょ）の歌として多く残している。

子規は短夜をそのような本意に則ってよんではない。病床に呻吟する子規にとっては、短い夏の夜も寝苦しい。暁方まで眠れず、うとうとすると悪い夢をみる。余命の短かさを思い、死は夢の中まで跳梁する。

三月二十七日、脊髄の中央部にできた瘤状の腫物を^{てきしめ}剔出する手術は失敗する。患部に生じた二つの穴のうち一つは、いつまでも癒着しないで、絶えず膿を出しつづける。四月下旬に再び手術を受けた。術後は今回もはかばかしくない。「再度ノ疲勞一寸先ハ黒闇々」(五月三日、健愚陀和上宛)と漱石に「病子規」は訴えている。

五月二十九日には熱が再び九度五分に上る。夕方、主治医佐藤三吉博士の来診を受け、膿を一合余しぼりとる。

こんな連日に見かねた叔父加藤恒忠(拓川)が六月三日、赤十字社から看護婦加藤はま子を頼んでくれる。下総関宿の出身で、ときに二十歳。看護婦の仕事は、隔日来診の医師の介助であり、来ない日には、医師に代り膿を絞り出すのだった。

掲出句の「見とる人」は加藤看護婦を指したのであろう。たえず傷口の膿を拭きとらねばならず、ときどき足に走る疼痛に叫びをあげる患者をなだめ、けっして楽な看護ではない。休む暇のない看護婦が、短夜にうとうとと居眠りをする。それを眠れない患者がそっとみつめているというのが句意。ちよっぴりユーモラスだ。子規は俳句の種に、ほんのわずかな隙をも見のがさない。「我を見とる人」が転寝する、それをわれが見るといふ患者と看護婦との立場を逆に

した構図に、たわいもなく興じ、そのことで痛苦を凌いでいる自分を子規は客観視しているのである。

先に掲げた「病中」五句中の一句、

餘命いくばくかある夜短し

右の句を記し、熊本在住の漱石に、「病牀に在ては親など近くして心弱きことも申されねば却て千里外の貴兄に向つて思ふ事もらし候」(六月十六日)と書き送る。つぶやきのような字足らずの一句からも子規の不安はよく伝わってくる。

「誠を申せば死といふことより外に何の望も無之候 生きて居る間に死にたいとは思ふ筈はないやうなれど回復の望なくして苦痛をうくる程世に苦しきものは無之候。此世にて添はれぬために情死するも同じことと存候 他より見れば心弱きやうに見ゆべけれど今日苦痛減じて多少の愉快を感じる時でさへ未来を考へ見れば再びどんな苦が来るや分らずと思へば今が今にても死といふことは辞せず候」(同上書簡・漱石宛)

このような死に囚われた同じ手紙に、子規はまた、看護婦を付けてくれた叔父の配慮に礼をいふ、

「今では看護婦さへ傍に置きて残りなき養生、生に取てはチト榮耀過る事と存候へとも生きて居る間は一日でも楽はしたく贅沢を尽し申候」とも書いている。しきりに死を思う、その一方で、「神田川の鰻がくひたい」などと贅沢が口をついて出る。子規の享樂的ともいえる贅沢好きが、彼をけっして厭世家にはさせないのだ。

看護婦やうたゝ寐さめて蠅を打つ

同三十年作。『俳句稿』夏、動物に出る句である。うたゝ寝をした
掲出句の事後を詠った作であるが、同じ状況をよんだ句は他にもあ
る。

蠅打を持て居眠るみとりかな

眠らんとす汝静に蠅を打て

これら三句の中では、「看護婦や」の一句が秀でていよう。看取り
人にあるまじきうたゝ寝をした自分を恥らい咎めるかのように、蠅
を打つ。受けとりようでは、看護婦がその場をつくらう胡麻化しと
もみえるが、子規は、世馴れないういしさとみたのではないか。
ういういしさという点では、冒頭に掲げた「見とる人」のうたゝ寝
の句は、いっそう、その感が漂う。

子規が看護婦との間に異性関係があったと、河東碧梧桐は「意外
なる秘事」(『子規の回想』)に記している。

「病牀手記」(明治三十年)十月九日にこんな二句がある。

水の月物かたまらで流れけり

手のものを取落としけり水の月

右の句には、「流産」と詞書が頭部に付いている。子規に多い空想
句とみれば、さしたる作とも思われないが、子規は碧梧桐に、次の
ように話したという。

「ボンヤリ流産と題して、誰にもわからないやうにしておいたが、
それは自分の切ない情緒の記念であつたといふのだ。さうして其の

事の始終を漱石にだけ秘かに打ち明けて、前後処置を依頼しておい
た其の結果が流産といふことになったといふ話の大筋である」(『子
規の回想』)

病床を見舞った碧梧桐が、膝がしらと膝がしらの間へ手を入れ、
痛む足を摩擦してやる。その掌から受ける肉の感じは久しく忘れて
いた性欲を惹起させたものか、子規が看護婦とのかかわりについて、
右のような告白をしたというのである。

看護婦は一月余、子規の傍にいて、七月中旬には、大阪に去つて
いる。

涌き立つや土用の空の阿波太郎

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。夏、時候に出る。「病牀手記」(明
治三十年)八月二日に記されている。同日の作。蕪村の十句集にあ
やかり、土用千十句、行水十一句、その他六句中にみえる。季語は
土用。

阿波太郎は阿波地方固有の雲の峰の名。瀬戸内の強い日射が上昇
気流となり、雲の峰を生んでいる。大阪地方の丹波太郎、九州での
比古太郎など。他に風土の名高い名を冠せて、石見太郎、坂東太郎、
安達太郎とすこぶる多い。

掲出句は阿波での実見をよんだものではない。実見風に写実味を
出しているが、半ば、ことばのおもしろさに興じたものか。「涌き立

つ」と縁語風に、阿波に泡を掛けたものではないか。

涌き立つのはなるほど、土用の空の泡ならぬ、阿波太郎という雲の峰だという意。談林風のことばあそびは、暑い盛りを病床で耐える子規の銷夏法のひとつであった。

船をあがる横浜に夜の明け易き

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。夏、時候に出る。新聞「日本」（明治32年6月18日）に「短夜」と題し載る。掲出句は、表題「船」を詠み込む「船十句集」の一句。下五の表記が「明易き」となっている。

十句集は、蕪村の『新花摘』の一題十句の試みにヒントを得て、明治二十九年（一八九六）四月、表題「烟」十句から開始された月一回の郵送による回覧句会。船十句集は、三十年十一月に行なったもの、子規は、三十年八月二日から十一月二十一日まで一日のメモと作句を主にした「病牀手記」をつけている。それによると、掲出句は十一月二日の作。船十句を作句中で、当日は他にこんな句を作っている。

海賊の舟に蚊遣す博奕哉
紅葉見の舟著けて居る三軒屋
渡し場や下駄はいて乗る舟の霜
故郷近く夏橙を船に売る

夏休みの書生に逢ひぬ瀬戸の船

右の句群では、掲出句の他には夏橙の句に注目する。いかにも題詠風な作為が目立つ中において、両句は景も情も率直に詠まれている、一読して、十七音が胸にとび込んでくる。

掲出句は「明け易き」が兼三夏の季語。短夜と同じであるが、短夜が夜の側から夜の時間の短さをいうのに対し、明易しは早い夜明けを迎えた側からの感懐がこめられている。

横浜は、幕末、安政六年（一八五九）開港された、神戸とともに日本を代表する二大貿易港。封建社会にあって、開港による仕事を求めて全国から集まった働き手の大衆性と西欧文明を移入する窓口となる居留外国人の進取な気風とが織りなすミナトヨコハマの独特な雰囲気は、若者を魅了した。ハイカラな、軽快な明るさとその裏面にひそむ憂愁とは、時代を先取りしたような魅力があった。

掲出句は、題詠でありながら、子規の実感がこめられている。「船をあがる」は横浜に対する常套句のようであるが、単なるうつろなことばではない。私は一句の背後に子規の体験が踏まえられているとみている。

子規が生涯で最大の喜びの一つだった上京を叔父加藤拓川に許されるのが明治十六年（一八八三）六月八日。その十二日には神戸を高砂丸で出航。十四日未明（古賀蔵人推定では午前二時頃）横浜港に着いている。はじめて横浜に上陸した日のことを忘れるはずがない。「夜の明け易き」は、上記のような季語の用法の他に、横浜

が日本の文明開化の夜明けを導いた地であり、自分の新たな生涯も横浜に船をあげる一步からはじまるとのよろこびがこめられているのではないか。

掲出句を作った十一月二日の日記に、「昨夜睡眠不足ノタメ頭ボラライズシテ居ル」などと記す。Polarizeとは偏光する。考えることが、偏り、頭がうまく働かないくらいの意であろうが、この日、子規に、横浜を「夜の明け易き」地との発見をさせた頭脳は、決して「ボラライズ」していない。句意は、改めて記すまでもないであろう。

(にわきき)
庭前に水打て月山の上

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。夏、人事に出る。新聞「日本」（明治32年7月25日）に「打水」と題し載る。『春夏秋冬』夏之部、打水に、中七の表記「水うつて」として、採られている。「病牀手記」によると、三十年八月五日に、「午後閑飄雨来ル、席上打水十句ヲ作ル」とある。これは月次十句集の兼題とは別に、蕪村に傾倒する子規の「勉強」（上原三川宛子規書簡）の結果である。掲出句は打水十句の中の一句。十句中では、掲出句の他に、こんな句に注目した。

水打つや上野の山にとゞけとて

裏町や水打ちさして馬車を見る

打水の松に雫す八日月

打水十句はかならずしも連作ではないので、他の句の場景を藉り、

一句の鑑賞を行うのは厳密さを欠くことにはなろう。が、子規には想像句と写実的な句とが混在している事情を了解した上で、写実的な句の場景を援用することは、大いに参考になろう。

掲出句の「山の上」とは、上野の高台を指したもののか。「水打つや」の句と同一の場景とみてよいであろう。

夕方、庭先に水を打つと、なんとも涼しい。間もなく月が上野の山の上にあがったというのである。

子規は打水の句が二十八句ある。三十年が十三句と多い。この年以後にはない。ということとは、打水という外部世界との交渉をもつ季語を用いる機会が、以後なくなることを意味していよう。掲出句は、その意味で、子規がすすんで、屋外に場景を設定した、寓意も象徴もない、写生重視の佳句として尊重し掲げたのである。

虫干やけふは俳書の家集の部

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。夏、人事に出る。新聞「日本」（明治32年7月30日）に「蟲干」と題し載る。「病牀手記」の三十年八月十九日に出る。虫干が晩夏の季語。土用の曝書である。

土用の虫干の時期となり、こゝ数日来、曝書にせわしい。おびただしい俳書の中から、今日は個人句集の部を虫干することよの意。

暑いさなか、曝書にかまけて銷夏の日をおくっている子規のさまが彷彿とする。「けふは」と連日の曝書をそれとなく暗示する表現は、

他方、無聊な日々にあつて、曝書に暮らしの刺激を求める子規のやりきれなさのような思いがつたわる。また、それは、俳句分類用に購入した多量の俳書を所有している自負の気持ちでもあろう。「俳書の家集の部」との俳書を細分化したい方は、そんなことを思わせる。

この夏は病床で、家集を中心に連日、俳句分類に従事している。

「病牀手記」に記載されている江戸期の個人句集名をはじめから羅列すると、こんな俳書がある。

太無発句集、吏登句集、夢太句集、蕪村句集など。これは、子規の蔵する俳書、家集のごく一部。

夕立の音ばかりして通りけり

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。夏、天文に出る。新聞「日本」（明治32年7月29日）に「夕立」と題し載る。三十年七月十八日、子規庵における運座での作。当日は、熊本から漱石が帰省し加わっている。「来る十八日（日曜）午後より拙宅に於て臨時小集相催度御光来願上候 漱石がやりたさう故催し申候」（河東碧梧桐宛子規書簡）とある。漱石を囲む会の形をとり、庵主の他、紅緑、露月、蒼苔、瀾水、碧梧桐、楽天、水湖、肋骨、飄亭、把栗らが集まった。夕立は第二回目の運座での席題。掲出句の他に、こんな句が出た。

夕立に一気呵成の十句哉

把栗

旅にして野に夕立の小家哉

蒼苔

夕立や舞めく市の十萬家

漱石

亭に座して夕立雲を竹に招く

紅緑

夕立すべくとして庭の梧桐そよぐ

楽天

雷をり／＼雨戸けたゝましき夕立哉

肋骨

夕立や夕顔の棚の雫落つ

碧梧桐

海の上を夕立の雲飛揚せり

露月

蕪村派の子規一門の大概がうかがわれる。「蕪村は漢語をも古語をも極端に用ゐたり。佶屈なりやすき漢語も佶屈ならしめざりき。冗漫なりやすき古語も冗漫ならしめざりき。野卑なりやすき俗語も野卑ならしめざりき。俗語を用ゐたる一茶の外は漢語にも古語にも彼に匹敵者を有せざりき。用語の一点においても蕪村は俳句界独歩の人なり。」（「俳人蕪村」と子規が、蕪村の用語の独自さを賞賛したのがこの年。

右の句群、いずれも漢詩文口調をとどめている。「一気呵成」の成語、「旅にして」「亭に座して」「夕立すべくとして」などの句法、「飛揚せり」「舞めく」「十萬家」などの漢語。一回の運座の例句にすぎないが、蕪村調への傾注の様子があざやかだ。

その中であつて、子規の掲出句は、もっともすっきりしている。

場景は異なるも、句調は、「月天心貧しき町を通りけり」の蕪村調。

「雷の音ばかりして通りけり」では平凡。夕立が雨粒を落さないで、音ばかりするとはいかなる意味か。雷鳴がして、あたりが暗く

なり、いまにも夕立が来るけはいをつくりながら、音ばかりが通りすぎ、ついに雨滴が落ちなかった意ではないか。

「夕立の」と軽く小休止する。夕立の来るけはいを想像する。「音ばかりして」の音は雷鳴。ゴロゴロ鳴り出しながら、夕立は来ず仕舞。そのまゝ雷鳴だけでおわったのである。結局、

「音がすれば必ず雨粒も落ちたに相違ないのであるが、庭を見ても木草を見ても濡れたやうには見えない。否実際ぬれても居らぬので、今の夕立は音ばかりであった、雨滴は落さなかったと形容したのである」(寒川風骨『春子規俳句評釈』)

右に風骨がいう雷鳴を考えないで、音ばかりの夕立というものが想像できるだろうか。たしかに、掲出句の表現されたことばの意味はその通りであるが、現実になような夕立が想像されない以上、通り一遍のことばの解釈にすぎない。

一見、なにげない句でありながら、省略が見事に効き、空間の処理が巧みな句である。

下駄洗ふ音無川や五月晴

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。夏、天文に出る。「根岸名所ノ内」と前書がある。新聞「日本」(明治32年6月19日)にも同様の前書が付き、載る。「病牀手記」(明治30年)の八月二十七日に根岸雑詠と題し詠まれた十六句中の一句。

「呉竹の根岸の里は上野の山蔭にして、幽趣あるが故にや都下の遊人多くはここに隠棲す」(『江戸名所図会』)と天保七年(一八三六)刊の案内書にみえる景觀は、明治維新後もそれほど変わっていない。上野の高台を背景にした田園風景と音無川がこの地に数多くの名勝地をもたらししている。音無川は、練馬の三宝寺池を水源とする石神井川の下流で、王子に入り王子川となり、王子権現の麓を流れるあたりから、音無川と呼ばれる。下流は荒川に注ぐ。音無川の名称は、王子権現が紀州熊野権現の分社であったところから紀州の音無川と同じ名をとって名付けたものといわれる。(鈴木倉之助・『江戸文学地名辞典』)紀州の音無川は、音もせず静かに流れる川の意を托した歌枕の地。根岸の音無川は歌枕ではないが、きまつて清流音無川と形容される皎潔たる流れが愛されていた。

掲出句の主眼は、都人士の逍遙の堤、清流音無川で下駄を洗うという卑近な些事のおかしさにある。折から五月晴ならば、昨日の五月雨に汚れた下駄を洗うのも庶民の暮らしの一齣である。下駄を履くこともなくなった今日では、こんな光景はみられないが、雑巾をもって下駄の泥を洗い落とす雨上りの川辺の情景は、筆者の少年の頃、昭和三十年あたりまでごく身近に見かけたものだ。ましてや、掲出句が詠まれた明治三十年には、音無川の清流をそぞろ歩く、風流人士がいる一方、下駄を洗う者もいて当然。

子規は、あるいは、高名な「漁父之辞」(『楚辞』)の一節、「滄浪の水清まば以て吾が纓を濯ふべし」(滄浪の水の流れがきれいな時に

は冠の紐を洗うを思い起こしていたかもしれない。「漁父之辞」は、さらに、滄浪の水が濁っている時には、わが足を洗うのがいいとある。時勢の移り変わりに順応する柔軟な態度の必要を漁父の口を藉りて屈原に述べた詩であるが、掲出句の前書に「根岸名所ノ内」と付けた子規の意図は、ユーモアたっぷりに、音無川を滄浪の水と見立てたのかもしれない。すると、子規自身は、おのれに、どこか屈原のような局促なところを感じていたのであろうか。

五月晴は仲夏の季語。五月雨がいまの梅雨をさすことから、五月の青空というよりも、梅雨の晴間をいうようである。久しぶりに五月雨が上がり、みえた晴間である。

雨もあがり、折から五月晴、音無川の流れて、世が世なれば、纓

(冠の紐)ならぬ下駄を洗っていることよの意。

ちなみに「病牀手記」八月二十七日の根岸雑詠に詠み込まれた根岸名勝、名物から数句を掲げる。

風 あぐる 子守女や御院田
門 鎖す 狸横町の時雨かな
青田に出でず御行の松を見て返る
朝顔に 朝商ひす笹の雪
草花に茶代を吝む鶯花園

蛸や几を壓す椎の影

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。秋、動物に出る。新聞「日本」（明治33年10月8日）に「蛸」と題し、載る。「病牀手記」（明治30年）八月十九日には中七の表記が「机を壓す」とある。『春夏秋冬』秋之部（碧梧桐・虚子共編）には「机を厭す」とあり、杜撰。

蛸が初秋の季語。夜明けや夕刻に鳴く。掲出句は以下の場景から夕景。庭の椎の木影が濡縁から部屋の中へ、そして隅の机にまで届く。影もいつか魍魎を宿すがごとく夕影となっている。「壓す」の措辞が格別に重い。

「壓す」といふ言葉は啻に木影の壓し被さって来る光景ばかりでなく、夕闇の身辺に迫る様をも想はせる心の声が燃焼されたものである。」（白田亜浪『評釈子規の名句』）

右に亜浪のいう「心の声」とはなんであるのか、明確に掴むことはむずかしい。あるいは子規自身、それほどたしかなものではなかったであろう。が、「壓す」ということばはなぜか、このときの子規の意識、あるいは意識を支えている周縁の無意識にもうすこしこたわりたくさせる。

「病牀手記」にはこの日、「今日ハ加藤叔結婚ノ日ナレバ母君ハ麻布山元町ヘ行カル」とある。子規の暮らしの保証人にあたる加藤拓川は三十九歳。山県県出身の医師樗村清徳の長女ヒサと結婚した。

この日以後なぜか子規は不快な数日をすごしている。翌八月二十日の手記には、「朝来不愉快極マル」「夕刻疲労甚シク終ニ不快甚シ」。二十一日には、「夕方ヨリシバシ不愉快ナリ」とある。子規を不愉快にさせる誘因がなんであるのかはつきりしない。日頃、はつきりしたものでなければ、因果関係を記すのが子規の性行の特徴である。が、このときは、突然不愉快になっている。子規自身、自分の性情にやりきれなさを感じているようだ。

掲出句の「壓す」はこのような不愉快の気持とどこかで通じているのではないか。母君は叔父の婚礼に出むき、家の中はガランとしている。パリから帰朝後、結婚をし、幸せな家庭を築こうとする叔父と、炭酸クレオソートや散薬(興奮剤)、水薬など薬づけになって終日呻吟し臥褥したまゝの自分と、対比すること自体、意味がないが、意味のないことにこだわって暗く沈み込んでいる自分にはっとする。みると、椎の木の花影が黒々と机を脅かしているではないか。

我宿は椎の木深く蚊の多き

明30

右のような句もこの夏詠んでいる。椎の木は、先人が「先たのむ椎の木も有夏木立 芭蕉」(「幻住庵記」)と、椎の木陰を力と頼み、旅の病身を休めたものであったが、いま自分には、椎の花影が生き物のように迫ってくるのである。蝸はいっそう、意識を轟立たせるかのようにだ。

いもうとが日覆をまくる萩の月

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。秋、草に出る。長い前書がある。「清女が簾かゝげたるそれは雲の上の御事これは根岸の隅のあはらやに親一人子二人の侘住居」。新聞「日本」(明治32年9月20日)には前書の「親一人子二人の侘住居」の個所を省略した形で載る。「病牀手記」(明治30年)によると八月十九日作とわかる。

前書の清女云々の故事は名高い。中宮定子が清少納言に、香炉峰の雪はどうだろうかと訊ねられたところ、咄嗟に、御簾を高くあげられたという。中宮も清少納言も『白民文集』の「遣愛寺の鐘は枕を欬てて聴き、香炉峰の雪は簾を撥けて看る」の文句を踏まえ、機知に富んだ問答をした。

右の様子は宮中でのこと、根岸の片隅のあばらやに住む親一人子二人の侘住居では、いかがかと、前書からして、これはパロディの前触れ。

才女清少納言とは似ても似つかない妹が、兄のために、御簾ならぬ日除をまくると、折から庭先の萩叢にさす月光が眼にとび込んでくることよとの意。

絵屏風の撫子赤し子を憶ふ

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。夏、草に出る。新聞「日本」附録（明治34年7月8日）に「撫子」と題し、載る。『春夏秋冬』夏之部（碧梧桐・虚子共編）にも出る。中七の表記が「撫し子赤し」とある。

季語は撫子、晩夏。屏風は古代、中国からもたらされたもの、江戸時代には金屏風、銀屏風を「きんびょう、ぎんびょう」と称し、さかんに用いた。『続五論』（元禄一二）にも「金屏の松の古さよ冬ごもり 芭蕉」が出る。たゞ、季語として公認されるのは明治以後。よって、掲出句の絵屏風は季語ではない。

一句のおもしろさは、中七から下五への転じにある。撫子は『万葉集』以来、和歌に詠まれてきた秋の七草の一つ。中国から「なでしこ」（石竹）が入ってくると、「やまとなでしこ」（大和撫子）と呼ばれた。いまでもこの名称からしとやかな日本女性を連想するように、古来、なでしこは、「撫でし子」であり、「かわいい女」を暗示した。淡紅色の可憐な花は女性のイメージを重ねることによって、いっそうやさしさを増す。

さらに撫子は、もうひとつ「とこなつ」（常夏）という異名を持っている。とこなつは床夏であり、花の名に共寝をする床の意を懸けている。こんな例がその代表。「塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより

妹と我が寝る床夏の花」（『古今集』夏・躬恒）塵ひとつ付かないように気をつかっている。その名のようにいとしい妹（妻）と共寝をする床を連想させる花ですから。

ところで掲出句は屏風に描かれた撫子の赤い花から子へ思いが及んでいる。花の撫子から、撫でし子、かわいい女へ。すると、下五の子は若い女性。娘の意。わが娘と狭義に受けとらなくてもよいのではないか。あるいは、芸妓などを指したものか。

絵屏風に描かれた撫子の花は赤い。撫でし子の想像から、いつか馴染んだ、あの子へと思いがひろがる。もちろん亡き子を持った親の立場を思い描いてもよい。

萩芒来年逢んさりながら

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。秋、草に出る。「送漱石」と前書がある。「病牀手記」（明治30年）の九月六日に、「漱石明日一番汽車にて新橋を発する由端書あり句を送る」と前書が付き、掲出句と「秋雨荷物ぬらすな風引くな」とがみえる。

萩芒は萩と芒の意。萩が初秋の季語。芒は三秋。先掲の手記（九月六日）には、当日のメモに、「俳句ヲ分類ス（『蓼太句集二』）」の他、「庭前ノ萩僅カニ咲キ初メタリ芒ハ已ニ七月下旬ヨリ穂ニ現ハル」とある。この注記により一句の、萩芒は、子規庵庭前の囑目と知られる。

子規には、上五に萩芒と置いた句が十三句ある。明治二十四年（一八九一）から詠われている。なかでも、二十九年（一八九六）には、萩芒と並立させた句の他、萩と芒を対比した句が目をはく。

萩芒萩は芒に押されけり

萩芒われに落馬の心あり

萩の路薄の路と分れけり

庭前四句

萩薄中に水汲む小道かな

萩低く薄の風をかぶりけり

萩は月に芒は風になる夕

萩芒風絶ゆることもなかりけり

読小説

其はてが萩と薄の心中かな

草庵晩秋

萩は骨に薄白髪にならんとす

右の句群によると、萩と芒は、子規庵に植えられている草花の中でも、主人の愛着が格別に深いもののひとつ。萩と芒は子規の分身のように擬人化されている。

萩芒に寄せる思いは、三十年（一八九七）に入り、いっそう切実なものとなる。「病牀手記」の九月十一日には、長い前書がつき、次のような萩芒の句が記されている。

今年の春以来脊髄なやみて夏はあるかなきかにかきくらし

庭の秋見んこといかにあるべきと思ひしもいまだ命運尽き
 ず今萩盛り薄なびくけしきをうれしくも打ちながめて

萩芒 今年は見たり来年は

蝸牛のように頸をのぼし、頭をあげることはできても、病床からはなれられない子規にとり、閉塞された、やりきれなさは、庭の草花への異様なほどの関心となつて噴出する。「昨日医師ノ話ニ譬ノ下ノ痛ミノ処ニケ処イヨイヨ穴アタリト、二三日前ヨリ膿出初メタルナリ」（「病牀手記」九月二十一日）という病状は、「いまだ命運尽きず」とはいえ、萩や芒の日々刻々の変化をいよいよとしく心血を注いでながめることになる。今年の秋の萩や芒が今生の見取めと思えば、萩や芒はあらんかぎりの風情を醸し出して、子規の眼に耀やいたに違いない。

掲出句の萩芒は、以上のような状況の中で摘まれた、今年の秋を象徴する草花であるが、さらに、いささかの工夫が施されているようだ。

一句は、庭前に、いまを盛りと花をつけている萩や穂をみせる芒をながめるにつけ、来年の再会を約して、いま君を送るのだが、はたしてそれまでわが身が生きながらえることができるかどうか——との意。

漱石への送別句であり、萩芒で切れる、取り合わせの句。来年の再会を願うのは、子規であり、相手は漱石である。が、一句の表の意は、ことしの萩芒に対して、来年の再会を約しているようにうた

われている。一句一章の句にも受けとれるところに巧妙さがある。さらに、萩と芒とが来年の再会を云々しているようにも思われる。

いくばくもない命運を詠いながら、句に暗さがない。それはどこまでも萩芒という具体的な個物に執着し、観念をよまないからだ。

掲出句の下五「さりながら」は特異なことばである。子規は、作句当日、『蓼太句集』を用い、俳句分類の作業もしていた。ちなみに同句集を開くと「帷子やぬげば風もつ物ながら」と、「物ながら」はあっても、「さりながら」はない。『蕪村句集』にもない。先例がありそうな用語である。

漱石は、熊本の第五高等学校にいた。夏休み中の六月二十九日、父の直克が八十四歳で死去したので、妻をともない急抛上京し、九月まで在京。その間、子規庵での句会にも三回出席した。ふたたび熊本へ帰る漱石との別れに、子規は無性にさみしくなり句を送った。漱石は子規に、句稿の添削を乞うた。この年第二十三稿(四十句)をみて、子規は十四句に◎、十三句に○をつけた。

人に死し鶴に生れて牙え返る

漱石

木瓜咲くや漱石拙を守るべく

堇程な小さき人に生まれたし

右の三句など、漱石俳句なかの出色の作。いずれも本年の作である。子規も漱石の技量がいちだんとあがったことを大いに称えた。右の漱石の作は二句が転生をよんだもの。子規は印象深く思い、三句に◎をつけた。

乱れ心野分に走り狂ひたく

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。秋、天文に出る。同稿には、掲出句の次にもう一句、類似の発想の句が載る。

狂乱の野分ありたき我思ひ

『病牀手記』(明治30年)によると、掲出句は九月十日、狂乱の一句は翌十一日の作。「乱れ心」といふ、「狂乱」といふ、子規の密なぬ心のうちがのぞかれる。「野分に走り狂ひたく」の緊密な十二音に対し、「乱れ心」はいささか蛇足めき、説明っぽい。同じことは、狂乱の句の「我思ひ」にも該当する。しかし、子規は、表現の完成よりは、おのれの実感に執し、「乱れ心」や「我思ひ」にこだわりたい気持ちをつらぬいた。野分の中を思いきり走り、狂いたいという「乱れ心」はなんなのか。

作句当日のメモには、次のような記述がある。

俳句ヲ分類ス(新題林発句集)

小説ヲ草シ夜二時ニ至ル

夕暮体温三十七度九分夜九時頃迄苦シ

簡単な記述ながら、子規の気持を忖度することができる。夕方から夜分にかけて発熱、苦しくて睡れない夜がつづく。結核性脊髄カリエスの病状は悪化することはあっても快癒の見込みなし。その中で、俳句分類の作業を日課として課し、小説「曼珠沙華」の筆を執る。

死は近づきぬ、しかもやるべき仕事は澎湃として起る。そのシレンマのくるしさを、払拭しようと、「野分に走り狂ひたく」とか「狂乱の野分ありたき」と想像したもの。

野分は仲秋の季語。草木を吹き分ける意から秋の暴風に名付けられたもの。台風の名であるが、野分という呼称からは、どこか田分めいた一縷の狂気が感じられる。

野分に立ち向かって走り出し、すべてをかなぐり捨てて狂いたい、私の乱れた心は——の意。

やかましきものニコライの鐘秋の蟬 明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。秋、動物に出る。「病牀手記」（明治30年）によると、九月十日、野分の句とともに作られている。

乱れ心野分に走り狂ひたく

野分してもさすがは風の草

野分はれて手負の蝶の低く飛ぶ

台風一過、空青く澄み、やかましく鳴き出した秋蟬に、駿河台の崖上に立つニコライ堂の鐘が根岸の子規庵まで、ガンガンときこえてくる。秋の蟬が三秋の季語。

『枕草子』風に、へ〇〇のものゝ、類纂の形をとり、ニコライの鐘と秋の蟬を並べたもの。この両者を「やかましきもの」と断言した子規の気分は、いささか平常心を失っている。気が立っているの

ある。それを子規自身は「乱れ心」といつている。たとえば、台風のさなか、わあっと大声を発し走り出す狂人の心境になりたいようだという。掲出句は、平常は表にあらわれない、「乱れ心」によって掴まれた、鋭利な感覚に瞠目する。

ニコライ堂は、明治二十四年（一八九一）二月に神田区駿河台東紅梅町にニコライ主教により建てられたハリスト復活聖堂。円錐形の鐘楼には八個の鐘が吊られ、「此堂に登れば我が東京府下の大半を囑目すと云」（『東京名所鑑』・相沢求、明治25年）とあるように、鐘も府下一帯にひびきわたった。「やかましきもの」といつて、一見、鐘と蟬とを並立してあるものの、強調したいのは、ニコライの鐘の方ではなかったか。明治の日本人子規の感性には、ガンガンと鳴りわたるロシア人好みのニコライ堂の鐘の音色はどうも合わなかったらしい。そこを端的に、「やかましきもの」といつた利かん坊子規の姿には生彩がある。

（はとふき）
鳩吹の貧しき里を通りけり 明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。秋、人事に出る。新聞「日本」（明治30年11月6日）にも載る。「病牀手記」（明治30年）の十月十二日の作。「こゝろみに貧富の課題をものせんとの野心、やつて是程の難題未だ存不申候」（水落義式宛）とある。貧十句題詠中の句。

鳩吹が三秋の季語。獺人が鹿を呼び寄せるために山鳩の泣き声を

両手を合わせて出すこと。『連歌新式』（広安5年）に出る季語であるが、新鮮味がある。

一読して、句意明らか。「草枯て狐の飛脚通りけり 蕪村」とあるように「通りけり」の形は蕪村調を踏襲したものか。民話風のなつかしさが醸し出され、味わいある佳品。

受付日 一九九一年十月三十一日